

教育勅語解説一時代背景

教育勅語は、明治天皇陛下が私たち国民に、日本人の生き方の根本としてお示し下さったものです。それは、明治維新からおよそ四分の一世紀たった、明治二十三年十月三十日のことでした。

明治維新

明治維新への動きは、1853年アメリカ海軍ペリー提督が率いる四隻の黒船が浦賀沖に姿を現したことから始まります。ペリー提督はそれまで鎖国政策をとっていた徳川幕府に対して、武力で威しながら開国することを迫りました。

十八世紀後半にイギリスから始まった産業革命は、次第にアメリカやヨーロッパ各国に広がりました。産業革命によって工業生産力を増した西洋の国々は、安く原材料を手に入れ、工業生産物を売る市場にするために、植民地と呼ばれる支配地の獲得を目指して、アジア・アフリカ地域への進出を開始していました。

お隣の中国は当時は「清」という国でした。イギリスとの「アヘン戦争」に敗れ、中国の人々は外国人に支配される、惨めで苦しい生活を強いられていました。その近くの東南アジアの国々も、ほとんどが西洋の植民地でした。そこには国の独立などなく、従ってその国の人々は外国人に支配される生活を強いられたのです。強大な物質文明を手にした西洋諸国による世界支配がどんどん進められていたのです。

黒船の来航は、そのような驚異がいよいよ日本にも迫ってきたことの現われでした。

そこから幕末の動乱が始まります。開国をするべきか。鎖国を続けるべきか。日本の政治のありかたはどのようにすればよいのか。吉田松陰、坂本竜馬、西郷隆盛、勝海舟といった人たちが、この日本の危機を乗り越えるために活躍した時代でした。

そして1867年、時の将軍徳川慶喜は政治を行う権限を天皇陛下にお返しする「大政奉還」を申し出、陛下にお許しをいただきました。続いて明治天皇陛下によって「大政復古の大神令」が発せられ、明治新政府による新しい政治が始まりました。

明治政府は西洋諸国に追いつくことを目標に、物質的に豊かな国となり強い軍隊を持つという「富国強兵」政策をまっしぐらに推し進めました。西洋諸国からの圧力は迫っていました。現に不平等な条約を結ばされたままで、改定を求めても相手にもされない状況でした。このままでは植民地と同様です。日本の独立と国民を守るためにはそれしか道はなかったのです。

西洋に追いつけ、追い越せ。日本は国をあげて西洋の文化・文明を取り入れることに夢中になりました。その成果には目覚しいものがあり、世界の人々を驚かすものでした。

しかし、西洋のものをいち早く取り入れることに熱心なあまり、日本人が本来持っていたすばらしさを、日本人自身が忘れてしまう、日本人自身がそのすばらしさを逆に古めかしいもの、役にたたないものと考えてしまう、ということになったのです。

外国人から見た日本人

それでは、本来日本人が持っていたすばらしさとはどのようなものだったのでしょうか。それは日本にやってきた西洋人たちが驚きと感動をもって書き留めてくれていました。

江戸時代の元禄三年にオランダ商館の医師として来日したドイツ人のケンペルの言葉です。

「世界中のいかなる国民でも、礼儀という点で日本人にまさるものはない。のみならず彼らの行状は、身分の低い百姓から最も身分の高い大名に至るまで大変礼儀正しいので、われわれは国全体を礼儀作法を教える高等学校と呼んでよかろう。」

礼儀正しさについては、ペリー提督も

「日本人ほど丁重に礼儀正しくふるまう国民は、世界中どこにもいない。」という言葉を残しています。

明治十年に来日し、大森貝塚を発見したことで有名なアメリカ人のモースはこんな記録を残しています。

「(宿の)亭主に、私が帰るまで、時計と金を預かってくれぬかと聞いたら、彼は快く承知した。召使が一人、ふたのない、浅い塗り盆を持って私の部屋に来て、それが私の所有物を入れるものだと言った。(中略)私は主人を呼んだ。彼もまた、ここに置いても絶対に安全であり、彼はこれらを入れる金庫も、他の品物も持っていないのであると言った。いまだかつて、日本中のいかなるふすまにも、錠も鍵もかんぬきも見つけない事実からして、この国民がいかに正直であるかを理解した私は、この実験をあえてしようと決心し、おそらく私の留守中に何回も客が入るであろうし、また家中の召使でも投宿客でもが、楽々と入りえるこの部屋に、ふたのない盆に銀貨と紙幣とで八十ドルと金時計とを入れたものを残して去った。我々は一週間にわたる旅をしたのであるが、帰ってみると、時計はいうに及ばず、小銭の一セントに至るまで、私がそれらを残して行った時と全く同様に、ふたのない盆の上ののっていた。」

この点については、16世紀にキリスト教の布教のために来日したザビエ

ルも

「キリスト教信者の地方であっても、そうでない地方であっても、盗みについてこれほどまでに節操（誘惑に負けないで信じることも守ることも）のある人々を見たことがありません。」と記録しています。

さらにモースは日本人がいかに道徳的かということについて、このように述べています。

「衣服の簡素、家庭の整理、周囲の清潔、自然及びすべての自然物に対する愛、あっさりして魅力に富む芸術、挙動の礼儀正しさ、他人の感情についての思いやり・・・これらは恵まれた階級の人々ばかりでなく、最も貧しい人々も持っている特質である。」

イギリスの女性旅行家イザベラ・バードは、明治11年に来日し、感動を込めて次のように書きとめています。

「奥地や北海道を1200マイルに渡って旅をしたが、全く安全でしかも心配がなかった。世界中で日本ほど、婦人が危険にも無作法な目にもあわずに旅行できる国はない。」

「(三等列車での)三時間の旅であったが、他人や私たちに対する人々の礼儀正しい態度、そしてすべてのふるまいには私はただただ感心するばかりだった。それは美しいものであった。(中略)老人や目の不自由な人に対する日本人の気配りもこの旅で見聞した。私たちの最も良いマナーも日本人のマナーの気品、親切さには及ばない。」

「落とし物を道を戻ってまで探してくれた馬子(馬を使って人や物を運ぶ仕事をする人)に骨折り賃を差し上げようとしたのですが、『旅の終わりまで無事届けるのが当然の責任だ』と言って、どうしてもお金を受け取らなかった。」

「暑がっていると、女性たちがうちわで扇いでくれたので、お金を払おうとすると全く受け取りません。そして言うには『少しでも(お金を)取ることがあったら恥ずべきことだ。』」

自己の責任を全うし、富よりも誠実さを重んじる。自分優先、権利優先の利己主義ではなく、他人への気配り、礼儀を大切にする日本人の品性に彼女は強く心を動かされたようです。

このような日本のすばらしさこそ、縄文以来長い歴史の中で、日本の風土と日本人たちが積み上げ、育ててきた日本の伝統なのです。

外国人たちの心配

西洋人を驚かせるだけのすばらしさを持っていた日本人ですが、近代日本医学の父と呼ばれるドイツ人ベルツは、

明治九年の日記にこのように書いています。

「ところが、なんと不思議なことには、現代の日本人は自分自身の過去については、もう何も知りたくないのです。それどころか、教養ある人たちは、それを恥じてさえいます。『いや、何もかも野蛮なものでした。』と私に言明したものがあるかと思うと、またあるものは、わたしが日本の歴史について質問したとき、きっぱりと『われわれには歴史はありません。われわれの歴史は今からやっと始まるのです。』と断言しました。」

ドイツの歴史学者ランケは「その民族を滅ぼすには、まずその歴史を抹殺し、次に別の歴史を作ってこれを信奉させることだ。」という言葉を残していますが、教養ある日本人自身が、自らその罠の中に落ち込んでいったのです。

そんな日本人を心配する声も残っています。江戸時代の終わり、不平等条約として知られる日米修好通商条約を締結の際に通訳として立ち会ったオランダ人ヒューズケンはその後、次のように書き残しています。

「いまや私が愛しさを覚え始めているこの国よ、この進歩はほんとうに進歩なのか？この進歩は本当にお前のための進歩なのか？この国の人々の質朴な風習とともに、その飾り気のなさを私は賛美する。この国土の豊かさを見、いたるところに満ちている子供たちの楽しい笑い声を聞き、そしてどこにも悲惨なものを見出すことができなかつた私には、おお神よ、この幸福な情景が今や終わりを迎えようとしており、西洋の人々が彼らの重大な悪徳を持ち込もうとしているように思われてならないのである。」

パリのギメ東洋美術館の創始者であるエミール・ギメは彼の明治九年の日記にこう記しています。

「日本がヨーロッパの思想に関心を寄せるようになったとき、先駆的役割を果たした日本人は、私の考えでは、うわべだけを見て劣等感に陥るといふ誤りを犯したのだ。確かに彼らは、まだ蒸気を使用した工場も理工科学校も持っていなかった。しかしなんとすばらしいものを彼らは持っていたか。それらを理由なく放棄しているのだ。日本は日本の風習をあまり信用していない。日本はあまりにも急いで、その力と幸を生み出してきたいろいろな風俗、習慣、制度、思想さえも一掃しようとしている。日本は恐らく自分たちのを見直すときが来るだろう。私は日本のためにそう願っている。」

教育の危機

明治五年、新しい教育制度を定めた「学制」が発布されました。それは国民すべてが学校教育を受けることを目標としたものでした。しかしその内容は、利益を得ることと出世をすることが価値あることとした教育でした。日本の当時の世の中全体がそうであったように、西洋の文明を取り入れることばかりに夢中になり、日本の歴史や伝統、日本で昔から積み上げられてきた文化や学問をあってもないかのように、ときには古めかしい役にたたないも

のとして扱っていました。

岩手県の県令（今で言う知事）になった石井省一郎という人は、県内の学校を視察し、次のような意味の記録を書いています。

「例えば、昔から日本で勇者といえ、子供たちは鎮西八郎為朝、源義経などを語り、智者・忠臣と言え、楠正成、新田義貞を挙げるのが常となっていた。ところが、今はそんな風は既になく、むしろアメリカ、ヨーロッパの豪傑を理想とするような風潮がみなぎっており、日本など顧みないような考え方の兆しがあった。つまり、欧米人を一等高く見て、日本人を劣等な国民とし、日本の歴史習慣を無視して欧米化せねばだめだという雰囲気になっていた。」

その極端な例が、初代文部大臣森有礼によって出された日本語を廃止しようという法案でした。それは日本が西洋のように文化・文明を発達させるために、日本語を使うことをやめ、英語を日本の言葉にしようとした法案でした。日本人自身が日本を捨てるような法案だったのです。

また当時の学校教育では、道徳教育は軽く見られていました。小学校での教育では、道徳を教える修身の時間は、教科や他の教育活動の中で一番価値の低いものとされました。その教科書も西洋の道徳や法律関係の本をただ翻訳しただけのでした。教科書といえ、国語教育のための読本さえもアメリカの読み物を直訳したものが使われていました。

教育に関する勅語

人々の暮らしぶりを身近に感じ、教育の混乱を見て将来の日本を心配していたのは先の石井岩手県令だけではありませんでした。今で言う県知事たちが集まった地方長官会議から「知識を求めるばかりの教育（知育）ばかりが進んで、人格の完成をめざす教育（徳育）が進んでいない」ことを心配して、徳育の方針を確立してほしいとの意見が内閣に提出されました。その主な内容は次のようなものでした。

「普通教育の要は、主として国民の徳性（道徳性）を育成し、その上で普通の知識・芸術（技術）を治めることにある。

しかるに現行の学制によれば、知識を主として専ら芸術（技術）のみを進歩させることに努め、徳育の一点においては全く欠けるところがある。

ゆえに小学校就学の子弟（児童）の状況を見ると、少しでも博学（理科）の学理を聴き、数学の初歩を修めれば、たちまちその知識を誇り、父兄を軽蔑し、軽躁浮薄の風潮を助長させるようになっている。

また、高等小学校を卒業する者は、往々にして父祖の仕事に従事することを好まず、官吏になろうとしたり、政治家になることを志す。（現代で言えば、高収入のみを望み、一流大手企業に就職することを希望すること）

さらに進んで中学に入るに及べば、学業中途の生徒でも、天下の政治を談じ、自ら校則を侵しながら、逆に職員の処置の当否を鳴らし、紛争を起こそうとする者すらいる。(自分が校則を破りながら、そのことの反省よりも、先生の指導のあり方をとやかく批判し、クレームをつけようとする)(中略)これは知育のみが進み、徳育が同時に進んでいないからであって、今その救済策を講じなければ、他日必ず臍をかむような悔いを残すであろう。(中略)「徳育の主義」を定めようと欲するのであれば、わが国固有の倫理に基づき、その教えを立てなければならない。そして、それが定まるならば、そのための教科書を選定し、倫理修身の時間を増やして徳育を起こすべきである。」

この意見書が大きなきっかけとなって、内閣も動き出し、やがて明治天皇陛下は徳育の基本となるものの案を作るようにつくるように、文部大臣にお命じにられました。

明治天皇陛下は、自ら髪型を西洋風にしたり、洋服を着用されたり、牛肉・牛乳を召し上がったたり、太陽暦を採用されたり、ご自身で馬に乗って兵隊を指揮されたりと、日本の近代化のために、今までの皇室の習慣を打ち破る行動をされておられました。その一方、世の中の西洋ばかりに偏った動きには大変ご心配をされておられました。特に教育のあり方についてご心配になられ、小さな子供たちの教育のための「幼学綱要」という文章をおつくりになられたりしておられました。

明治天皇陛下の命を受けて徳育の基本方針の案づくりに当たったのは、井上毅(こわし)、元田永孚(ながざね)という人物でした。二人の作った案をよしとされ、ご自身のお考えを付け加えられた陛下は、「教育に関する勅語(天皇が国民に対して発表するみこころを表した言葉)」として、首相と文部大臣を宮中に召されて、御自らお授けにられました。文部大臣はただちに全国にしらしめました。それがこの「教育勅語」です。

この勅語をいただいた全国の国民は大いに喜びました。当時の新聞には「わが日本の教育の大切な根本はこの勅語の中にある。」「私たちの国民教育の中心となる考え方はこの勅語の中にある。」という意味の記事が載せられたりしました。

それ以来、教育勅語は日本の国民教育の中心となってきました。太平洋戦争前には、この勅語が軍国主義のために利用されたこともあり、教育勅語は軍国主義のものだと誤解された時期もありました。しかし日本再生が叫ばれる今、余計な先入観は捨て、ただ純粹に、教育勅語自体にしっかりと向き合うべきときが今なのではないでしょうか。

教育勅語が出された当時からいろいろな立場の人が、いろいろな解説書を出しました。そのため多少の混乱がありました。そのとき案を作った井上は、

「解釈する前に、勅語を勅語として語らしめよ。」つまり「解釈する前にまず読んでほしい。何回も読み、暗唱することによっておのずと言葉の真意が伝わる」という意味の言葉を残しています。

特に小中学生の皆さんは、音読、暗唱から始めてみてはいかがでしょうか。必ず、あなた自身の魂に響いてくるものがあるはずです。

教育勅語解説その二一本文拝読

朕

*朕・・・私

「朕」という言葉は、「私」という意味で、自分自身を指して使う言葉です。この言葉ができた中国では、もとは一般の人々も、自分自身のことを表わす言葉として使っていました。中国をはじめて一つにまとめたのは秦という国でした。その王朝を作った始皇帝（紀元前259年～210年）が、この言葉を、国の君主である自分自身のことを指す言葉として使い始めました。それ以来この「朕」という言葉を使うことが出来るのは、一つの国に一人だけで、他の人は使うことが出来ない言葉となりました。

それにならって日本の天皇陛下は、ご自身のことを指す言葉として「朕」という言葉を使われていました。

しかし秦の国は中国を治める王朝としては、わずか15年しか続きませんでした。その後中国ではたびたび王朝が変わりました。君主が何人もいて対立したり、外国から侵入してきた者が君主になったり、家臣であったものが君主になったりという歴史が繰り返されてきました。君主と国民と関係が一定に保たれることが無かったので、「朕」という「国家にただ一人の存在」という意味は成り立たなくなってしまいました。

それとは違って日本では、国が始まって以来（少なくとも神武天皇が即位されてからでも、平成26年で2674年になります。）、万世一系の天皇陛下がいらっしゃいます。長い歴史の流れの中で政治の形は変化してきました。（律令制・幕藩制・議院内閣制）しかし「天皇陛下がいらっしゃる」というこの国の形（国体）は変わることなく続いてきているのです。だから「朕」という言葉が使えるのは日本の天皇陛下だけだといえます。

惟うに

*惟う・・・よく考えてみること

「おもう」の部分には「惟」という漢字が使われています。この漢字を使った熟語に「思惟」という言葉があります。これは物事を深く考えるときに使われる言葉です。

明治天皇陛下が、日本とはどのような国なのか、どのような教育が大切であ

るのかについて、深くお考えになられた事柄を、私たち国民にお示し下さったのが、この勅語の内容です。

我が

*我が・・・私たちの

「我が」という言葉は、複数を表わす言葉で、「私たちの」という意味を表わしています。

前に「朕」という言葉で、天皇陛下ご自身は神聖で他に代わるできない大切な御存在であることを示されました。それと同時に今度は、思いやりのある優しい御心から、

天皇陛下と国民全員を一まとめにして、「私たち」というお言葉を使われています。

そしてこの言葉に続く「皇祖皇宗」は天皇陛下のご先祖さまであると共に、私たち日本人全員の共通のご先祖様であることを示されているのです。

つまり日本という国は、「朕」という言葉を使うにふさわしい動かしがたい存在を中心にした、大きな家族であるとされているのです。そして国民のことをわが子のように思われる、天皇陛下の御愛情が示されているのです。

古くから天皇陛下は国民のことを「大御宝」と呼んで、大切にされてこられました。

明治天皇陛下が読まれた和歌に、「罪あらばわれをとがめよ天津神民はあが身の生みし子なれば」（罪があるのでしたら、どうか私を罰して下さい。天の神々様。国民は私が生んだ子どもなのですから。）とあります。また、「照るにつけ曇るにつけておもふかなわが民くさのうへはいかにと（晴れているときでも、曇りのときでも、私はいつも思っています。国民の生活はどのようであろうかと。）」天皇陛下が、国民のことをいかに大切に思われているかがうかがえる一節です。

皇祖皇宗

*皇祖皇宗・・・天皇のご先祖様

皇祖とは天照大神様など神武天皇につながる神々様、皇宗とは神武天皇以後の歴代の天皇陛下のことを指します。

日本という国とご皇室の始まりについては、日本最古の歴史書とされている「古事記」に、次のように記されています。

天地が初めて現れたときに、神々様がお住まいになる高天原に御出現になられたのは、

天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）様でした。その後まもなく、高御産巢日神（タカミムスヒノカミ）様と神産巢日神（カムムスヒノカミ）様が御出現になりました。さらに続いて二柱の神様が御出現になりました。

ここまでの五柱（イツハシラ）の神々様は男女の区別の無い神様で、男神と女神の両方の性質をお備えになられた神様でした。これらの神々様は天地が出来て早い時期に御出現になられた神々様ですので「別天神」（コトアマツカミ）様と申し上げます。

その次に「神代七代」（カミヨナナヨ）と申し上げる神々様が御出現になりました。その第一代が「国之常立神」（クニノトコタチノカミ）様でした。次の二代目の神様までは先と同じく男女の区別の無い神様でした。三代目から男神・女神に分かれて御出現になりました。その第七代が伊耶那岐神（イザナギノカミ）様（男神）と伊耶那美神（イザナミノカミ）様（女神）でした。

高天原の神々様は皆様の意見の結果として、イザナギノミコト様とイザナミノミコト様に下界の海をお示しになられ、「この漂っている国を修めつくり、固めなせ」とお命じなり、

天の沼矛（アメノヌカボコ）をお与えになられました。つまり日本の国造りをお二人の神様に命じられたのです。

ここで注目したいのは、神々様は会議をなさって結論を出され、その結論に一体化されて行動なさっているということです。日本の議会制はここから始まっているのです。

お二人の神様は天空に浮いている天の浮き橋にお立ちになり、海に矛を下ろし、海水を「こおろ、こおろ」とかき混ぜ、矛を引き上げました。するとその先から海水がしたり落ち、塩が固まって島が出来ました。それがオノコロジマです。

その後、この島を拠点に次々と島をお産みになることになります。しかしその結婚の儀式のときに、女神の方から声をかけたことから、手足のない水蛭子（ヒルコ）や、泡のように不完全な島である淡島（アワシマ）が産まれてしまいました。

お二人の神様はこの問題を解決するために高天原に一度お帰りになり、結婚の儀式をやり直すようにと、天つ神様方の指示をお受けになりました。天つ神様のご助言によって、この「国産み」が再開されることかわかるように、この国はどこまでも神様の思いの通う所なのです。

結婚の儀式をやり直されたお二人の神様は、淡路島を最初として、日本の国土（大八島国）（オオヤシマノクニ）をお産みになられます。

以上が日本の国土の始まりでした。

その後、お二人の神様はこの日本の国にお住まいになる神々様をお産みになられました。しかし、火の神様をお産みになったときにイザナミノミコト様は火傷を負われ、それがもとで亡くなられて、黄泉の国に行かれることに

なります。

イザナギノミコト様はひどく悲しまれ、黄泉の国に会いに行かれます。しかし恐ろしい姿に変わり果てたイザナミノミコト様に追われ、命かながら逃げ帰ることになっておしまいになります。

黄泉の国での汚れを払うために、イザナギノミコト様は日向で「ミソギハライ」をされます。その時にも多くの神様をお産みになられます。初めは不幸を呼ぶ神様でしたが、やがて清い神々様をお生みになられます。最後には顔をおすすぎになられました。左の目をお洗いになったときに御出現になられたのが、天に照り輝く太陽の神様である天照大神（アマテラスオオミカミ）様でした。右の目をお洗いになったときに御出現になられたのが、月の神様である月読命（ツキヨミノミコト）様でした。鼻を現れたときに御出現になられたのが風の神様である健甕須佐之男命（タケハヤスサノオノミコト）様でした。

このとき、イザナギノミコト様は「自分はたくさんの神々を生んできたが、その果てに三柱の尊い子を得た。」とお喜びになりました。ご自身が身につけていた首飾りをアマテラスオオミカミ様にお与えになり、「高天原をしらせ（治めろ）」とお命じになられました。

その後「古事記」は「アマテラスオオミカミ様とスサノオノミコト様のお話」「アマテラスオオミカミ様の岩戸隠れと岩戸開きのお話」「ヤマタノオロチのお話」「因幡の白うさぎから始まる大国主命（オオクニヌシノミコト）様の国造りのお話」「国譲りのお話」と続き、日本が一つのまとまった国となっていく様子を描いています。

そして、アマテラスオオミカミ様と高御産巢日神様は、御子孫であるニギノミコト様に「この日本の国はお前がしらす（治める）国である。降りて治めなさい。」とお命じになりました。その時「三種の神器」をお与えになり、国を治める者として必要な三つの「徳目（道德の項目）」をお示しになられました。

「三種の神器」とは、「八咫鏡（ヤタノカガミ）」「ヤサカノ曲玉（マガタマ）」「草薙剣（クサナギノツルギ）」のことです。

ヤタノカガミは天の岩戸開きのときにアマテラスオオミカミ様を写す鏡としてつかわれたものです。表される「徳」は「知」です。

ヤサカノマガタマは同じく天の岩戸開きのときに、神々様がアマテラスオオミカミ様に贈った曲玉です。表される「徳」は「仁（思いやりの心）」です。クサナギノツルギは、スサノオノミコト様が、ヤマタノオロチを退治したときに、その尾から出てきたもので、スサノオノミコト様がアマテラスオオミカミ様にご報告したときに贈ったものです。表される「徳」は「勇」です。

これらの「三種の神器」は、現在でも天皇の位を表すシンボルとして大切に扱われています。以後神々様からのお示しを受け継がれた歴代の天皇陛下は、「知・仁・勇」の三徳を持って、日本の国を治められてきたのでした。こうして、アマテラスオオミカミ様のご子孫が、高天原からこの日本をしらす（治める）ために日向の高千穂に降り立たれました。これが「天孫降臨」です。

そのニニギノミコト様のご子孫の「神武天皇」が、橿原の地で都を開き、初代の天皇になられたのです。

神武天皇陛下のその時の御心は、「古事記」とほぼ同時期に書かれた「日本書紀」に次のようなお言葉に残されています。

「今、私はこの橿原の山林を開いて都を作り、慎んで天皇の位につく。これからこの国の民が心安らかに住める、平和な世の中にしたいと思う。この国が、神のお住まいにふさわしい清らかな所となり、さらに他の国もそうになったならば、世界も一軒の家のように、仲むつまじい平和な世界となるだろう。それは、何と素晴らしいことではないか。」

その御心は受け継がれ、今上陛下はここから数えて百二十五代めの天皇陛下にあたられます。

「八紘一字」という言葉があります。この言葉は神武天皇が橿原宮で、ご即位されたとき、「八紘をおおいて宇（いえ）にせむこと」つまり「世界も一軒の家のように」という理想を述べられた言葉なのです。戦後、この言葉が日本の他国への侵略しようとした考え方を代表しているかのように扱われたことは、非常に残念なことです。

以上が「古事記」に記された、日本という国とご皇室の始まりです。

しかし、残念ながらそこに記された記録は完全なものではありません。

まず「古事記」を一読しただけで、次のような疑問がわいてくるでしょう。「なぜ古事記には天地創造や人類発祥の記録がないのか。」「なぜ古事記と日本書紀では最初に御出現された神様の名前が違うのか。」「なぜ日本が乱れたあの時期に書かれたのか。」「日本書紀にある『ある本によると・・・』という本とは何で、どこにいったのか。」「太安万侶、稗田阿礼とはどのような人物なのか。」

さらに、神武天皇陛下の即位は紀元前660年とされていますが、日本にはそれよりはるかに永い歴史があり、しかも非常に発達した古代文明があったことが、考古学の成果によって少しずつあきらかになってきています。

「古事記」「日本書紀」ともにかなりの歴史の改ざんと省略があります。また比喻（たとえ）を使って描かれている所もあります。

「神武天皇」陛下以前にも多くの「スメラミコト（天皇の正式な呼び方）」

様が存在され、「神武天皇」は何回かあった大天変地異の、その最近の時の復興にご尽力された方であり、決して「初めの」方ではないこと。天地創造の神様からもっと長い長い歴史があり、多くの神々様のお力でこの世界が造られてきたこと、神様の次元や格の違いがあやふやになっていることなどが、他の古文献であきらかになってきています。

今後はさらに、それらの事情があきらかになってくることでしょう。しかし、やはりまず「古事記」「日本書紀」を学ぶことは大切なことです。今後私達は「本当の日本の歴史」をあきらかにしていくことに努めて行かなくてはなりません。その前に、まず「古事記」「日本書紀」に描かれた内容を知り、神々の時代から現代へと続く歴史を持つ日本の国の有り難さ、神々の世界からの繋がりを持つ天皇陛下という御存在の有り難さを知ること。そしてこのような国に生まれさせて頂けたことの有り難さと誇りを実感することから、すべてを始めなくてはならないからです。

「古事記」「日本書紀」の内容は単なる「神話（単なる作り話）」に過ぎない。そんな批判の声もあります。それに対しては、歴史学者として有名なトインビーの、あの有名な言葉を持って答えたいと思います。

「十二・三歳ぐらいまでに民族の神話を学ばなかった民族は例外なく滅んでいる。」

そして歴史学者ランケの、この言葉も肝に銘じ正しい歴史の学習を続けていきたいと思えます。

「その民族を滅ぼすには、まず歴史を抹消し、次に別の歴史を作って信奉させることだ。」

国を肇むること宏遠に

* 肇むる・・・開き始める。

* 宏遠・・・広く、遠い様子。

このように日本という国は神々様のご活躍された時代から繋がる古い古い歴史を持った国なのです。しかもその歴史は一度も途絶えたことがない、世界唯一の古代国家なのです。

ここで注目しておきたいことは、明治天皇陛下は国を「建てる」では無く「肇める」というお言葉を使ってらっしゃるということです。国が「肇め」られたのが神代の遠い昔のことであり、広く高い理想に基づくものであったとおっしゃっているのです。

日本の国には他の国のように何百年、何千年というような「建国」の歴史は無いのです。

天地創造の時から、神々様の時代から日本の国が始められていった悠久の歴史があるのです。どこかの国から独立した、どこかの地域を征服したとい

う歴史はないのです。

徳を樹つること深厚なり

*徳・・・仁徳。恵み。

「徳」とは、「心が正しくて行いが人の道にあっていること」「心から相手を従わせるような人格」「おかげ、恵み、恩恵」ということを表わす言葉です。皇祖皇宗の方々は、それをまるで樹木を植えていくように、国民に植え付けられたのです。

ここが外国の皇帝や王と、日本の天皇陛下の大きな違いなのです。外国の皇帝や王は強い軍事力や経済力をもってその国民を支配してきました。だから支配者に力があるうちは国民は従っていました。しかしそれ以上に力がある者が現れると、たちまちその地位は取って代わられました。外国の国民は皇帝や王の力をただ恐れて従っているだけでした。それはまるで動物界で行われる弱肉強食の仕組みと変わりありませんでした。

逆に言えば外国の皇帝や王は、外国の攻撃から自分の身を守る事を考えなければならなかったと同時に、自分の国の国民がいつ敵に回って自分を攻撃してくるかわからない、という立場にいたのです。だからみんな強い軍隊を持ち、頑丈な城壁に守られたお城の中に住む必要があったのです。

日本の天皇陛下は力をもって国民を従えるのではなく、「徳」を国民の心の中に深く植え込まれることをされてこられました。だから国民は喜んで天皇陛下に従いました。天皇陛下と国民の関係はゆるぎなく、他に代わる事が出来ないものとなっていたのです。

そのことがよく現れているのが天皇陛下のお住まいである皇居の姿です。現在の皇居はもともとは徳川幕府の拠点である江戸城です。皇居本来の姿を示しているのは京都御所です。そこには敵の侵入を防ぐための堀や石垣もありません。もし仮に天皇陛下に危害を加えようとする者があれば、高くもない堀を乗り越えて、障子や襖だけの内部に簡単に侵入することができたのです。それでも陛下に危害を加えようとした者や王朝を倒そうとした者はありませんでした。そのような事を心配する必要もありませんでした。

高松宮宣仁（のぶひと）親王殿下は次のように語られています。

「皇族というのは国民に護ってもらっているんだから、過剰な警備なんかいらぬ。堀をめぐらして城壁を構えて、大々的に警護しなければならないような皇室なら、何百年も前に滅んでいぬよ。」

天皇陛下のお住まいといえば、仁徳天皇の有名なお話しをここで紹介します。

仁徳天皇が位につかれて、四年目の二月のことでした。天皇陛下がお住まいの高い所に上がられて遠くをご覧になると、家々からは食事の準備を

するための煙が上がっていませんでした。

そこで天皇陛下は「これは百姓たちがすでに貧しくなっていて、家で煮炊きする者が少なくなったことが原因だ。都であるこの地でもこの有様である。遠くの地方ではどのようにひどい状況であろうか。」とおっしゃいました。そしてすぐその三月には、「今よりのち、三年間は税を納めなくてもよい。」という詔を出されました。少しでも百姓たちの苦勞を少なくしようとされたのです。

その後は、天皇陛下ご自身から質素儉約に努められました。たとえお住まいの垣根が崩れても修理なさらず、お屋敷に風や雨が入ってくるようになって、お気にもなされないご様子でした。

このように百姓たちと苦勞を共になさるうちに、気候も順調になり、作物もよく実って、百姓たちの生活はだんだんと豊かになっていきました。あれから三年の後、天皇陛下は再びお住まいの高い所に上がられました。ここからは家々から多くの煙が立ち昇っている様子を見渡すことができました。天皇陛下は大変お喜びになられたご様子で、お側にいた皇后陛下に「私はすでに豊かになった。もう心配することはない。」とおっしゃいました。皇后陛下は不思議に思われて、「宮殿は壊れたままの所が多く、雨露をしのぐことさえ満足にできない状態です。それをどうして豊かになったとおっしゃるのですか。」とお尋ねになりました。すると天皇陛下は、「君は民をもって本とするものである。国民が豊かになったということは、私がすでに豊かになったということだ。」とおっしゃいました。

「自分たちが豊かになったのは天皇陛下のお陰だ。しかし天皇陛下ご自身は今も大変ご不便な生活をなさっている。」そう知った百姓たちは、様々な品物を差し上げようとしたのですが、天皇陛下はそれをお受け取りにはなられませんでした。

それからさらに三年の後、天皇陛下は百姓たちにお住まいの修理をようやくお許しになられました。

百姓たちは、年寄りを助けながら、幼い子どもの手を引いて、我もわれもと喜んで宮殿に向かい、ご奉仕に励みました。昼夜も分かたず仕事に励んだので、りっぱな宮殿に仕上がるまでに、それほどの月日はかかりませんでした。

我が臣民克く忠に克く孝に

* 忠・・・国民が真心をもって天皇陛下につくすこと。

* 孝・・・子が真心をもって父母につくすこと。

ここで再び「我が国民は」と親しく呼びかけられ、「よく忠で、よく孝であったので」とお言葉を続けられています。

日本という国は以上にお話してきたような国の形（国体）なので、国民の精神も他の国民とは違ったものとなってきました。

歴代の天皇陛下は、天地を創られた神々様のご意志を受け継がれ、「仁」の心を持って国を治めて来られました。国民はそれに対して、「まことの心」でお仕え申し上げていました。

ただ一時の権力、経済力、軍事力に屈服して、心の中には不満をいっているような他の国の君臣関係とは大きく違っています。

日本の国民が天皇陛下に対する心持ち（忠）は、孝行な子どもが親に対する心持ち（孝）と同じなのです。また天皇陛下に対する心持ちは、天地を創造され、今もなお天地を統一運営されている神々様に対する心持ちに繋がってくることなのです。つまり大自然に対する、感謝と敬意の心持ちに繋がってくることなのです。

我が国においては忠と孝は一つのことなのです。私達の祖先は真心を持って天皇陛下にお仕え申し上げ、私達子孫も真心を持って天皇陛下にお仕え申し上げます。祖先と同じ真心を持って天皇陛下にお仕えするということは、「忠」であって、そのまま「孝」であるということなのです。

億兆心を一つにして、世世その美をなせるは

* 億兆・・・数が多いこと。

* 世世・・・代々。

* 美をなす・・・美しく道徳的な行動をとる。

「億兆」とは数え切れないほどの数の多さを指している言葉です。つまり太古の昔から現在に至るまでに、この国に生きたすべての日本国民のことを指します。その「膨大な数の日本国民が心を一つにして、永い永い時間の流れの中で代々に渡って『美しい生き方、美しい事業、美しい行動』を実践していったことは」とお言葉を続けられています。

それ我が国体の精華にして

* 精華・・・純粹で美しい花。

「その美しい実践の一つひとつは私達の日本の国の美しい花と呼ぶべきものであって」とされています。

花は置かれた所で咲きます。花は置かれた場所に不満を言うことはありません。どのように厳しい環境にあっても、強靱にもその使命を貫き通し、いつか必ず花を咲かせます。富や名誉など問題外です。人に見られていてもいなくても、関係ありません。しかし、神様はその姿を「おお、花よ。」と見ていらっしゃるのです。

教育の淵源また實にここに存す

* 淵源・・・根本。

「日本の教育の根元にあるもの、日本の教育のあり方の根本とするべきものは、ここにある」と、おっしゃっています。

「教育はどうあるべきなのか。」「日本の国はどこに向かうべきなのか。」と迷う私達現代の日本人に、「日本とはどういう国なのか、思い出しなさい。」とおっしゃっているような気がしてなりません。

教育勅語にお示し頂いた道德項目

続いて次のような徳目（道德の項目）をお示し頂いています。

- 一、孝行子どもは親に孝行しましょう。
- 二、友愛兄弟姉妹は仲良くしましょう。
- 三、夫婦の和夫婦はいつも仲むつまじくしましょう。
- 四、朋友の信友だちはお互いに信じあってつきあいましょう。
- 五、謙遜自分の行動を慎みましょう。
- 六、博愛広くすべての人に愛の手をさしのべましょう。
- 七、修学学習業勉学にはげみ、職業を身につけましょう。
- 八、知能啓発智と徳を養い、才能を伸ばしましょう。
- 九、徳器成就人格の向上につとめましょう。
- 十、公益世務広く世の人びとや社会のためになる仕事にはげみましょう。
- 十一、遵法法律や規則を守り、社会の秩序に従いましょう。
- 十二、義勇正しい勇氣をもって国や社会、国民のために真心をつくしましょう。

これらの道德の項目は具体的にはどのような事柄を表しているのかは、「美をなせる」人びと、つまり私達日本人の先輩たちの生き方を通して学んでいきたいと思えます。

「偉人伝」を読むことは、その意味でとても大切なことなのです。「偉人伝」を読む目的は「どのようにして成功したのか」を学ぶことではありません。時代や環境が変わろうと、変化しないで流れ続ける「人としての生き方、使命」を感じ取り、たった今の自分の生き方に活かしていくことにあるのです。

是の如きは独り朕が忠良なる臣民たるのみならず

* 独り～のみならず・・・単に～であるだけでなく。

「以上述べてきたことは、単に忠実で善良な国民であるばかりではなく」

又以て爾祖先の遺風を顕彰するに足らん

* 遺風・・・先祖の残してきた美しい生き方。

* 顕彰・・・現し明らかにする。

* 足る・・・十分にできる。

「日本の祖先たちが積み上げ、残してきた美しい生き方、美しい事業、美しい行動を表し明らかにすることが、十分に出来ることである。」

この道は実に我が皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の俱に遵守すべき所

* 遺訓・・・残した教訓。

* 遵守・・・少しもそむかず、よく守ること。

「この勅語によってお示し頂いた事柄は、先に述べてきたように神々様と、歴代の天皇陛下が残された教訓であるので、その子孫である天皇陛下も、そして同じくその子孫である日本国民も皆が一緒に従って守っていかなくてはならないもの」なのです。

之を古今に通じて謬らず

* 古今・・・昔と今。

* 謬らず・・・まちがった方向にみちびくことがない。

また「この教訓は昔に限らず今でも、実践して人としての生き方を間違えることがない、永遠不変の真理であって、」

之を中外に施して悖らず

* 中外・・・国の内外。

* 施す・・・実践する。

* 悖らず・・・道理にそむく。反する。

「国内でも、国外でも、実践して人の道に背くことがない、人類共通の真理である」のです。

教育勅語の海外で、どのように受け取られていたのかについては、次のような話があります。

日露戦争。それは近代化間もない小国日本が、大国ロシアに挑んだ戦いでした。予想に反して勝ち続ける日本の様子に驚いたアメリカ人は、アメリカに派遣されていた金子堅太郎に次のように尋ねました。「日本の勝利は国民の教育がそうさせたのだろう。日本の教育はどうなっているのか、教えて欲しい。」そこで金子は英訳していた教育勅語を見せました。それを見た多くのアメリカ人は、「まさにそのとおりだ。何と素晴らしい言葉だ。」と心からの称賛の声を上げたといえます。

明治41年、ロンドンで行われた国際道徳会議で、菊池大麓は教育勅語について講演しました。とても好評だったといえます。イギリスの教育家たちは「宗教以外にこのような素晴らしいものがあるとは」とうらやましがったといえます。

昭和天皇の教育にあたった杉浦重剛は、イギリスの友人に「日本人は宗教が無くても、どうして尊敬すべき国民となったのか」と尋ねられた時に、教育勅語を見せました。その友人はとても感心したといえます。

松江の湘南学園の創始者である岡崎功氏も、諸外国の教育者に教育勅語を

見せ、心からの賞賛を得たという体験を語っています。

そしてこう続けます。「『教育勅語』がこのように『立派な教育の基本』と賞賛され、かえって外国人が『教育勅語』を大切に飾って、実践躬行、現代に活用しているのに、本家の日本人はいけないという。その理由は『軍国主義の復活』と馬鹿の一つ覚えのようにいう。とんでもない。『教育勅語』は軍国主義とは全く反対のもので、『教育勅語』を実践しなかったのが『軍国主義』なのである。」と。

朕爾臣民と俱に拳拳服膺してみな其徳を一にせんことをこいねがう

＊拳拳服膺・・・胸の中にいつも抱いていて、心を尽くして守り行うこと。

教育勅語はこの驚くべきお言葉で締められています。つまり、「私はあなた達国民と一緒に、片時も忘れることなく、よくこれらの教えを守り、みんなでこの高い道徳の実践に努力していくこと心から希望します。」

高い地位にある者が、命令的に「こうなさい」と強制している姿ではありません。

「私自身がまず努力します。」「さあ、みんなでがんばりましょう。」「神々様の御心がこの地上に実現することを目指して、歴代の天皇陛下の意志を受け継ぎ、多くの日本国民の実践を受け継いで、さあ、みんなで美しく素晴らしい国を創っていきましょう。」そうお呼びかけになっていらっしゃるのです。

このお言葉にふれるとき、思い起こされるのはなんでしょうか。

阪神・淡路大震災のとき、ひざまづかれて避難所の方々にお声をかけられていた今上陛下のお姿。被災地に皇居でお摘みになられたすいせんの花束を捧げられ、車に乗られてからも「がんばって」とのポーズをとられた皇后陛下のお姿。東北大震災では異例のビデオでのお言葉を述べられ、被災地に深々と礼をされるお姿。

昭和天皇の直立不動でマッカーサー元帥と並んでお撮りになった写真。あの時、陛下はご自身の命に換えて日本の国民を守ろうとなさったのでした。戦後、日本各地を回られ、各地での国民からの歓迎に帽子を取られて返されているあのお姿。

そして、遠い昔から、今もこの時に、各地で各分野で活躍する日本人たち。名誉や富のためではなく、社会と人びとのために、時には日本以外の人びとのしあわせのために尽力する日本人の姿。

そんな「真に美しい魂の光景」が、次から次へと脳裏に浮かんでくることでしょう。

今こそ、私達日本国民一人ひとりが誇りを持って、高い理想の実現のために、それぞれの美しい生き方を貫き通して行こうではありませんか。

文責 H. K